ツッチ・コレクションにおいて新たに比定された梵文写本テクスト断片

加納和雄

はじめに

1930-1940年代にかけてGiuseppe Tucci（1894-1984）によってネパールおよびチベットで撮影された梵文古写本の写真資料は，長らく非公開のままローマの国立アジア・アフリカ研究所（旧IsMEO，現IsIAO）において厳重に保管されてきたが，近年Francesco Sferra教授によってその研究が推進され，次第にその全容が明らかにされつつある．そのTucci Collectionは，100枚のフィルムネガ，650枚のポジティブ・プリント，7巻のマイクロフィルム，50巻のフィルムなどから成る一大資料集成である．中でも特にチベットで発見された梵文古写本の写真資料は，質量ともにGöttingen Collectionと双璧をなす[1]貴重なものである．Göttingen Collectionは，Rahula Sāṅkṛtyāyanaが1930年代にチベットで撮影した梵文古写本のポジティブ・プリント（Patna所蔵のオリジナルネガからの焼き増し）の集成であり，その目録も刊行され，利用の便が図られている[2]．Tucci Collectionについても，Sferra教授による暫定目録が公開され，その全体像が見渡せるようになった[3]．

1930年代にTucciとSāṅkṛtyāyanaが提供したこれらの写真資料は，近年ますますその価値を増している[4]．1960年代以降，中国の政治情勢の劇的な変化にともない，それらの写本原本が事実上，閲覧不可能となってしまったからである[5]．最近，中国国内の研究機関と中国国外の研究機関（大正大学，ウィーン国立アカデミーなど）の共同研究によって未公開資料が徐々に校訂出版されつつあるが，チベットに所蔵される梵文写本全体が我々一般の研究者に公開される日はまだ遠いように思われる．

本稿筆者はそのような状況を省みて，これまでにGöttingen Collectionを調査し，その目録において未比定とされた梵文写本の解読を進め，比定の結果を報告してきた[6]．しかしその中には不鮮明な写真もあるため，Tucci Collectionに収録される写真と比較対照する必要性を感じていたが，そんな折Sferra教授の協力を得て，

その作業に着手することができ，さらには後者にのみ収録される梵文写本写真を拝見する機会にも恵まれた．本稿では Tucci Collection において筆者が新たに比定し得たテクスト断片について報告したい．

新比定テクスト断片

本稿で報告する新比定のテクスト断片は，『修習次第初篇』の写本を収めるフィルムセット（焼き増しのみ現存）の最初の２コマ（IsIAO, Ⅱ 1 および Ⅱ 12）に含まれている．この２コマには『修習次第初篇』のマーガディー写本の一部とともに，その上方に都合９枚のシャーラダー写本の貝葉の表裏（うち２枚は片面のみ）が収められているが，その内容は以下のようである．なお下掲表中の記号 IsIAO, Ⅱ 1/ Ⅱ 12 は各コマに附された暫定整理番号を示し，各コマに収録される貝葉には順に番号を振った．下線は新比定テクストを示す．

IsIAO, Ⅱ 1	IsIAO, Ⅱ 12	
1 未比定	1 未比定	
2 未比定（左端破損）	2 未比定（左端破損）	
3 Sajjana 著 *Sūtrālaṃkārapiṇḍārtha*	3 Sajjana 著 *Sūtrālaṃkārapiṇḍārtha*	
4 未比定（左端破損）	4 未比定（左端破損）	
5 著者不明 *Pratibandhasiddhiparicaya*	5 著者不明 *Pratibandhasiddhiparicaya*	
6 Sajjana 著 *Sūtrālaṃkārapiṇḍārtha*（含奥書）	6 Sajjana 著 *Sūtrālaṃkārapiṇḍārtha*	
7 著者不明『荘厳経論』註	7 Śāntarakṣita 著 *Bodhisattvasaṃvaraviṃśikāvṛtti*（片面のみ）	
8 BhK（＝『修習次第初篇』）, fol. 20a	8 著者不明『荘厳経論』註	
9 BhK, fol. 21a	9 未比定（片面のみ）	
10 BhK, fol. 22a	10 BhK, fol. 2a	19 BhK, fol. 11a
11 BhK, fol. 23a	11 BhK, fol. 3a	20 BhK, fol. 12a
12 BhK, fol. 24a	12 BhK, fol. 4a	21 BhK, fol. 13a
13 BhK, fol. 25a	13 BhK, fol. 5a	22 BhK, fol. 14a
14 BhK, fol. 26a	14 BhK, fol. 6a	23 BhK, fol. 15a
15 BhK, fol. 27a	15 BhK, fol. 7a	24 BhK, fol. 16a
16 BhK, fol. 28a	16 BhK, fol. 8a	25 BhK, fol. 17a
	17 BhK, fol. 9a	26 BhK, fol. 18a
	18 BhK, fol. 10a	27 BhK, fol. 19a

上記のように，９枚のシャーラダー写本のうちの５枚には４点の異なる作品のテクストが混在することが判明したが，残る４枚の比定作業は今後の課題である．

Tucci はこれらの写本の写真を 1939 年に sPos khang 寺で撮影したと報告し[7]，また王森編（1985 年）『民族図書館蔵梵文貝葉経目録』（以下『民族図書館目録』）[8] にも言及されていることから，1960 年前後から 1990 年代までの一時期，写本は北京に保管されていたことがわかる．なお，Sāṅkṛtyāyana が sPos khang 寺ではなく Zhwa lu 寺奥の院 Ri phug で『修習次第初篇』写本を管見している点には注意を要する[9]．以下，新たに比定し得た 4 点のテクストの概要を示す．

（1）Sajjana 著 *Sūtrālaṃkārapiṇḍārtha*

写真Ⅱ 1 の上から第 3 番目，写真Ⅱ 12 の上から第 6 番目の貝葉には，『荘厳経論』の「達意釈」の一部が，それぞれ 7 行と 5 行で書写される．当注釈はチベット訳・漢訳ともに存在しない未知のテクストで，その奥書に sūtrālaṅkārapiṇḍārthaḥ || kṛtiś śrīmatsajjanapādānām || と記されることから，サッジャナによって著わされた *Sūtrālaṅkārapiṇḍārtha* と題される作品であることがわかる．なお，Jñānaśrībhadra の手になる同題の作品とは異なる．

その内容は，修道論を軸に『荘厳経論』の内容をシュローカで纏めたもので，同著者の『究竟論提要』（*Mahāyānottaratantraśāstropadeśa*，梵本のみ現存）と近い関係にある[10]．写真に収められる 2 葉からは現時点でおよそ 100 偈が回収できるが，写真左端がピンボケしており，その部分の判読は不可能である．同作品は『民族図書館目録』の「第 16 番 Mahāyānasūtrālaṃkārapiṇḍārtha，大乗経荘厳論総義，1-6 残」[11] に相当するものと思われる．なお同目録にはこの作品が書写される貝葉は 6 葉であるとされるが，Tucci 撮影の写真には 2 葉のみが確認される[12]．この作品の著者サッジャナは 11 世紀後半にカシュミールで活躍した人物で，その著作には上述の『究竟論提要』および，『息子への書簡』（チベット訳のみ現存）が知られる[13]．

（2）著者不明『荘厳経論』註

写真Ⅱ 1 の 7 枚目，およびⅡ 12 の 8 枚目には，『荘厳経論』に対する未知の注釈の一部が書写される．その内容は，北京の写真をもとにすでに苫米地等流氏によって解読されており，『荘厳経論』の第 1 章・第 7 偈から第 13 偈を注釈する部分で，第 7 偈所説の大乗成立の七因を，第 8-13 偈が解説しているという構造を説明する[14]．

（3）Śāntarakṣita 著 *Bodhisattvasaṃvaraviṃśikāvṛtti*

写真 II 12 の 7 枚目の 1 葉には，Śāntarakṣita 著『菩薩律儀二十註』の冒頭部が 10 行で書写される．この貝葉は片面のみが撮影されているが，撮影されなかった面は表紙面であったと予想される．本作品にはチベット訳が存在し（東北 No. 4082），梵文テクストはデルゲ版 hi 帙 67a6-69b3 に相当する[15]．この写真によって Candragomin 著『菩薩律儀二十』の梵文原典（ただし第一，二偈のみ）が初めて回収された点は注目に値する．以下にその原文および訳を示しておこう．

praṇamya buddhān sasutān bhaktyā sampūjya śaktitaḥ |
yac chīlaṃ bodhisatvānāṃ sarvadikkālabhāvinām ||
nidhānaṃ sarvapuṇyānām āśayena pareṇa tat |
saṃvarasthāt samādeyaṃ vijñāt pratibalād guroḥ ||
仏子を伴う諸仏を信心もて礼拝し，渾身に供養してから，一切の場所と時間に存する菩薩たちの戒――一切福徳の根源――を，律儀に住する智者，能力ある師から，最高の志をもって授かるべし．

なお，写真はピントのずれのため帰敬文と冒頭偈を含む写本の左側部分の判読が困難であるが，同写本に含まれるテクストのほとんどが『菩薩地戒品』からの引用であるため，復元も可能である．『民族図書館目録』の第 10 番に対応し[16]，同目録には都合 3 葉あった旨が記されるが，Tucci の写真には 1 葉のみが撮影される．

（4）著者不明 *Pratibandhasiddhiparicaya*

写真 II 1 の 5 枚目および写真 II 12 の 5 枚目の貝葉にそれぞれ 7 行で書写されるテクストは，著者不明の *Pratibandhasiddhiparicaya* と題される作品の一部であることが，写真 II 12 の 6 行目の記述 pratibandhasiddhiparicaye pratibandhasāphalya-samarthanaṃ nāma madhyamānucaro 'nusāraḥ // から知られる．また写真 II 1 の 5 枚目の貝葉の第 2 行と第 5 行には Śaṅkaranandana 著 *Laghupratibandhasiddhi* の第 1，第 2 偈が引用されている[17]．このテクストにも，対応するチベット訳および漢訳は確認されていない．

おわりに

以上，『修習次第初篇』Tucci 撮影写本に附された 9 葉からなるシャーラダー写

本を検討し，そこに新たに比定し得た4点のテクスト断片について報告した．いずれも，その梵文原典が従来未発見であったテクストであり，上記（3）以外はチベット訳や漢訳などが残されていないため，その存在すら知られていなかった作品である．これら9葉の写本は，その書体から，またŚaṅkaranandanaの著作への注釈や，Sajjanaの著作が含まれる点から，カシュミールに由来する写本であると推測される．筆記年代は，9葉各々の筆跡が完全には一致しないため断定はできないが，文字の字体およびSajjanaの生存年代を考慮すると，11世紀後半をおよその上限年代と考えて大過はないと思われる．なお本稿は中間報告であり，各テクストの詳細な研究については目下準備中である．

1）Göttingenの大学兼州立図書館に所蔵されるこのコレクションは，オリジナルネガおよびその焼き増しより成るPatnaのSāṅkṛtyāyana Collectionと区別するために，正確には，GöttingenのSāṅkṛtyāyana Collectionと呼ぶべきであるが，ここでは，煩を避けてGöttingen Collectionと呼ぶ．

2）Franz Bandurski, Übersicht über die Göttinger Sammlungen der von RĀHULA SĀṄKṚTYĀYANA in Tibet aufgefundenen buddhistischen Sanskrit-Texte（Funde buddhistischer Sanskrit-Handschriften, Ⅲ）. In : *Untersuchungen zur buddhistischen Literatur. Sanskrit-Wörterbuch der buddhistischen Texte aus den Turfan-Funden*, Beiheft 5. Göttingen 1994, pp. 9-126.

3）Francesco Sferra, Sanskrit Manuscripts and Photos of Sanskrit Manuscripts in Giuseppe Tucci's Collection. A Preliminary Report. In: P. Balcerowicz-M. Mejor（ed.）, *On the Understanding of Other Cultures*. Proceedings of the International Conference on Sanskrit and Related Studies to Commemorate the Centenary of the Birth of Stanisław Schayer. *Studia Indologiczne 7*. Warsaw 2000, pp. 397-447.

4）ただしそれに先行してチベット所蔵梵文写本を将来してその存在を学術世界に知らしめたのは河口慧海である．彼は第二回入蔵時の1915年2月14日，シャルリプクにて『法華経』梵文貝葉写本原本および「二百三十六枚の木の皮の仏教の詩集」を授かり，我が国に将来した．河口慧海「西蔵およびネパールにおける図書」（承前），『図書館雑誌』28，1916年，5頁，および河口正『河口慧海・日本最初のチベット入国者』，春秋社，1961年，50頁を参照．上記『法華経』写本は東洋文庫に保管されている．Ryotai Kaneko et al, A Discriptive Catalogue of the Sanskrit Manuscripts in the Possession of the Toyo Bunko, *Memoirs of the Reserach Department of the Toyo Bunko 37*, 1979, pp. 159-191 : 3-Aに相当．なお『法華経』写本には一枚の未比定貝葉（東洋文庫3-B）が混入しているが，解読の結果，Trilocanadāsa作*Kātantravṛttipañjikā*の一節（5.2.21-29への注釈）であることが判明した．

5）TucciおよびSāṅkṛtyāyanaが披見し得た梵文写本の9割以上は，ツァン地方の諸寺に所蔵されていたが，それらは文化大革命前後にすべて中国当局によって回収され，一

時は北京民族文化宮に移されたが，その後ラサに返還された．現在はラサのチベット博物館に保存されるといわれるが，詳細は不明である（Ernst Steinkellner, *A Tale of Leaves. On Sanskrit Manuscripts in Tibet, their Past and their Future*. Amsterdam, 2004 参照）．北京民族文化宮に当時所蔵されていた梵文写本は王森氏によって整理され，その目録が以下の論文に再録されている．Hu von Hinüber, Some Remarks on the Sanskrit Manuscript of the Mūlasarvāstivāda-Prātimokṣasūtra found in Tibet. In : Ute Hüsken, Petra Kieffer-Pülz, and Anne Peters（eds.）, *Jaina-Itihāsa-Ratna, Festschrift für Gustav Roth zum 90. Geburstag*. Marburg: Indica et Tibetica Verlag. pp. 283-337.

Tucci と Sāṅkṛtyāyana は，ラサ（Kun bde gling は除く）に当時所蔵されていた梵文写本は閲覧しえなかったが，実はその中にも，多くの貴重な文献が含まれており，それらはウィーン国立アカデミーと中国蔵学中心によって共同で研究，公開が進められている．写本は現在ポタラ宮とチベット博物館に分蔵されるといわれるが，1930 年当時の状況については不明な点が多い．Sāṅkṛtyāyana と dGe 'dun chos 'phel は Rwa sgreng 寺に梵文写本が所蔵されるという情報に言及し，またペルツェク研究所は'Bras spungs 寺 Kun dga' ra ba に所蔵されていたという梵文写本に言及する（*'Bras spungs dgons du bzhugs su gsol ba'i dpe rnying dkar chag,* dPal brtsegs bod yig dpe rnying zhib 'jug khang, 2 Vols., Mi rigs dpe skrun khang, 2005 の序文参照）．

6）拙稿「ゲッティンゲン大学所蔵ラーフラ・サーンクリトヤーヤナ撮影梵文写本 Xc14/1, Xc14/57 について」，『密教文化』212, 2004 年，35-54 頁，および，Two Folios from Sthiramati's Triṃśikābhāṣya in Sanskrit Photographed by Rāhula Sāṅkṛtyāyana : Diplomatic and Critical Editions of Göttingen Xc14/1e. *WZKS* 49. 2005. pp.113-149.

7）Giuseppe Tucci, *Minor Buddhist Text,* Part Two, Roma 1958. p.6.

8）上記 Hu von Hinüber 論文所収.

9）Rāhula Sāṅkṛtyāyana, Second Search of Sanskrit Palm-leaf MSS. in Tibet, *JBORS* 23-1, 1937, pp.1-57 : p. 39, No. 267. Sāṅkṛtyāyana はこの写本を撮影していないが，冒頭葉を欠損するなどいくつかの特徴が Tucci の写真所収写本と一致するため同一写本である可能性が高い．

10）例えば四無量心・四念処の修習順序の解説はその典型である．*Sūtrālaṃkārapiṇḍārtha* 最終葉，裏面，1 行目：ātyantikaṃ nirodhena sukhaṃ yena prahīyate（Ms. prahāyate）| cittasya smṛtyupasthānān muditāṃ tena bhāvayet || ayoniśomanaskāraṃ dharmacintānuvartanāt | mārgena gocarīkurvann upekṣām pratipadyate ||（それによって際限無き安楽が捨てられるところのその滅によって，「心」念処にもとづいて「喜」を修習せよ．非如理作意を，「法」の思惟に従って，道によって対象としながら，「捨」を行じる．）

11）Hu von Hinüber 上掲論文 300 頁.

12）なお Sāṅkṛtyāyana のチベット発見梵文写本目録に同作品のタイトルは見当たらないが，Sāṅkṛtyāyana 上掲論文掲載の No. 321（Lakṣaṇaṭīkā, Zhwa lu, Śāradā/Ku °, 2 fols. Incomplete）は，写本の書体が同じシャーラダー体であり，論文中に抜粋されたテクストの内容が本作品の内容に近いため，同一作品の他の部分である可能性がある．

13）サッジャナの伝記と思想的立場については，拙稿「サッジャナ著『究竟論提要』—

著者および梵文写本について—」『密教文化研究所紀要』19，2006 年，28-51 頁参照．また『究竟論提要』については，高崎直道「宝性論の註釈 Mahāyānottaratantraśāstropadeśa の写本」『印仏研』23-2，1975 年，52-59 頁および，拙著，rNgog Blo ldan shes rab's Summary of the Ratnagotravibhāga : The First Tibetan Commentary on a Crucial Source for the Buddha-nature Doctrine. Dissertation Thesis submitted to Hamburg University. 2006 を参照されたい．

14）写真 II 1，2 行目：svake 'vatārāt svasyaiva vinaye darśanād api | audāryād atha gāmbhīryād aviruddhaiva dharmatā ||（= MSA I.11）samapravṛtteḥ pratipakṣatvād（= I.7d）ity asyāyaṃ nirdeśaḥ | ; 同 5 行目：audāryād atha gāmbhīryāt paripāko 'vikalpanā | deśanāto dvayasyāsmin sa copāyo niruttare ||（= I.13）siddher rutānyatvād（= I.7）ity asyāyaṃ pratinirdeśaḥ | 同 6-7 行目：bhāvābhāve 'bhāvād（= I.7c）ity atra yatroditāṃ vyāptiṃ vipaṃcayann āha || || vaikalyato virodhād anupāyatvāt tathāpy anupadeśāt na śrāvakayānam idaṃ bhavati mahāyānadharmākhyā（= I.9）||

15）藤田光寛「Candragomin 著〈菩薩律儀二十〉とその注釈書 2 種—校訂テクスト—」『密教文化研究所紀要』15，2002 年，横組 1-131 頁，および同「Śāntarakṣita 著〈律儀二十註〉について」『密教文化研究所紀要』16，2003 年，横組 1-19 頁参照．

16）Hu-von Hinüber 上掲論文 299 頁「*Bodhisattvasaṃvaraviṃśakavṛtti,* 菩薩律義二十論注（有蔵訳本）（第十号改入大乗論部），1-3 不全，Sāntarakṣita（sic）寂護（八世紀人）」．

17）写真 II 11，2 行目：yad ucyate | **tadbhāve tatpratītau syāt tatas tatkalpanānumā | sādhyasādhanayor bhede dharmād vā vastuno 'pi veti** |（= *Laghupratibandhasiddhi 1*）; 同 5 行目：yad āha || **bhede 'py abhedād anyatra dharmaikātmye tu vastutaḥ | vṛttivaicitrya mātreṇa tata evātmani svadhīr** iti ||（=*Laghupratibandhasiddhi 2*）. Vincent Eltschinger, Les œuvres de Śaṅkaranandana : Nouvelles ressources manuscrites, chronologie relative et identité confessionnelle. *Annali dell' Istituto Universitario Orientale di Napoli*（印刷中）参照．上記論文および Śaṅkaranandana の諸著作の未公開テクストを提供して頂いた Eltschinger 氏に記して感謝申し上げます．

（平成 20 年度文部科学省科学研究費・若手研究スタートアップによる研究成果）

〈キーワード〉　インド・チベット，10 ～ 12 世紀，写本学，Giuseppe Tucci, *Sūtrālaṃkārapiṇḍārtha*

（高野山大学助教）

『大方便仏報恩経』の成立問題

Sumet SUPALASET

0．はじめに

本経は父母，家族を捨てて出家するというブッダの宗教の本質が知恩・報恩という人間性の基本的理念に背反するものではないかとの外教からの批判を最初に掲げ，その批判に対処するために仏伝文学[1]の中から有名な須闍提太子の説話をはじめ，いくつかの印象深い説話を抽出して，その反証とした一種の編集物である．われわれが今回ことにこの資料に注目した所以は，過去において諸学者によって重要視されてきたにもかかわらず[2]その成立に関して根本的な問題を含んでいる点に存する．私はその成立に関して次のような四つの可能性を想定した．(1) それが現行のままのかたちで，インドにおいて成立しており，それがそのまま中国に移入されて中国で翻訳された．(2) 巻第六の優波離品第八を除いたかたちのものが，同じくインドから移入されて中国で翻訳された．(3) その時代までにバラバラに中国に移入され，翻訳されていたインド資料を中国において誰かが，仏教における知恩・報恩思想の存在を証明するという目的で編集した．(4) 教養ある中国人学者が同じ目的でインド将来の諸資料にもとづいて著作した．以上のうち，現時点において私は (2) あるいは (3) であり，とくに (3) の可能性が高いと推測している．

1．『薩婆多論』との関係における『大方便仏報恩経』

本資料には一つの顕著な特徴が存する．それは，その巻第六「憂波離品」第八の叙述の，その冒頭の枠物語的叙述を除いたすべてが『薩婆多毘尼毘婆沙』九巻（大正23，No.1440，略名『薩婆多論』）の第一巻の，まさに最初の行（大正23，503c11）からその最後の行（同，510b9）に至るまでと，全く同じである，という事実である．この論に関しては平川彰博士の『律蔵の研究 I』（『平川彰著作集』第9巻，1996）に厳密な資料批判がなされている．平川博士の資料論の要点は，